

〈原 著〉 第51回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

## 急性期病院が地域に行く押しかけ勉強会の評価

松江赤十字病院 看護部<sup>1)</sup> 同整形外科病棟<sup>2)</sup>

内部 孝子<sup>1)</sup> 脇田 和子<sup>1)</sup> 河瀬 裕子<sup>2)</sup>

The evaluation of patient-introducing sessions proposed from an acute care hospital to elderly care facilities

Takako UCHIBE<sup>1)</sup>, Kazuko WAKITA<sup>1)</sup>, Hiroko KAWASE<sup>2)</sup>

Nursing Department<sup>1)</sup>, Orthopedic ward<sup>2)</sup>, Japanese Red Cross Matsue Hospital

### 要 旨

当院では、2006年から地域の病院や施設の現状把握、情報共有、共通のニーズや疑問の解決を目的に院内外でさまざまな勉強会を行っている。その中で、当院からの提案で、退院する患者に関わる地域の医療福祉施設に押しかけ、看護実践をテーマに行う「押しかけ勉強会」がある。今回、2012～2014年度に実施した21回12テーマの「押しかけ勉強会」について、アンケートの記述から質的に評価した。その結果、【講義内容への関心の深まり】【言葉や内容への理解不足】【ケアの振り返りと今後への活用】【押しかけ勉強会継続の希望】【勉強会を通じた連携の深まり】を抽出した。患者を中心に組織の枠を外して自ら積極的に働きかけていくことが顔の見える日常的なつながりになり、情報交換、相互理解になると考察された。

Key Words : 押しかけ勉強会、地域連携、急性期病院

## I 諸 言

近年の医療制度改革・診療報酬改定において、従来の病院完結型ではなく医療の機能分化・地域医療連携と地域完結型が求められている<sup>1)</sup>。また、在院日数の短縮などから患者の医療やケアの継続が必要となり、地域連携の充実が叫ばれている<sup>2)</sup>。

当院は、二次医療圏で唯一の三次救急を担う地域の中核病院である。島根県の高齢化率は31.8% (2014年10月現在)<sup>3)</sup>、当院の入院患者の58.6% (2015年度) が65歳以上の高齢者で慢性疾患を抱えて退院する患者も多く、退院する患者の約17%に何らかの療養支援が必要である。退院後も安全で安定した在宅療養を送るには、医療・介護の継続が求められている<sup>2)</sup>。当院では、2006年から地域の病院や施設の現状把握、情報共有、共通のニーズや疑問の解決を行い、施設間の連携強化をはかることを目的に院内外でさまざまな勉強会を行っている。その中で当院

からの提案で、退院する患者に関わる地域の医療福祉施設に押しかけ、看護実践をテーマとする「押しかけ勉強会」がある。一施設への訪問で顔を突き合わせての勉強会となるため、日頃、疑問に感じていることを遠慮なく言い合い、気づいたら患者カンファレンスに発展しているなど、ケアの質向上につながる。今回、過去3年間に実施した「押しかけ勉強会」の評価を行ったので報告する。

## II 用語の操作上の定義

療養支援：当院では、患者が退院後も安全な安定した在宅療養をするために、地域でどのような療養生活を望むのか、どうすれば実現するのかを患者・家族と共に考え支援することから、退院支援ではなく療養支援という名称を用いている。

## III 調査方法

2012～2014年に実施した「押しかけ勉強会」(表

乳がん	3	看取り	1
ストーマ・スキンケア	2	褥瘡	2
心不全	4	感染予防	2
経管栄養	1	認知症	1
呼吸	1	脳卒中	1
食事療法	2	移動・移乗	1
合計 21回			

表1 押しかけ勉強会の内容及び回数

1) で回収した21回453部のアンケートの自由記載欄を熟読し、勉強会の内容、方法、連携の評価について記載された内容を抽出した。その内容から意味のまとまりごとにデータを抽出し、コード化した。次にその内容から類似性と相違性に着目してサブカテゴリとし、さらにカテゴリ化した。対象者には、アンケート調査時にアンケートの記述は自由意

思であること、個人情報の保護、結果の公表などの倫理的配慮について、口頭と文書で説明し、提出をもって同意とした。

#### IV 調査結果

勉強会の内容、方法、連携の評価について、5カテゴリ、15サブカテゴリ、178コードが抽出された(表2)。以下、カテゴリは【 】、サブカテゴリは《 》、自由記載の内容は「 」で表記する。

##### 1) 【講義内容への関心の深まり】

押しかけ勉強会は、講義形式のものがほとんどである。内容について、「解剖からでわかりやすく勉強になった」や「覚えやすい内容であった」と解剖などの基本的な内容を取り入れることで《わかりやすい講義内容》ととらえられていた。また、テーマによっては映像の使用や実技を中心に行い、伝え方を工夫している場合もある。「ストーマ造設術を見せてもらいより関心がもてた」や「実技があり、よ

カテゴリ (5)	サブカテゴリ (15)	コード (178)
講義内容への関心の深まり	わかりやすくした講義内容	解剖からでわかりやすく勉強になった 覚えやすい内容であった
	映像や写真の活用による関心の深まり	ストーマ造設術を見せてもらい、より関心がもてた 吸引のビデオを見せていただいたのがよかった
	実技等の体験学習で学び	実技があり、より理解することができた はさみの使い方一つにしても勉強になった
言葉や内容への理解不足	言葉や内容への理解不足	専門用語があり難しさがあった
	職種による理解の差	ヘルパー職には難しいところがあった
ケアの振り返りと今後への活用	多様な支援に向けてスキルアップしたい気持ち	いろいろな方向へ目を向けスキルアップできるようにしたい
	自分自身の自己管理への活用	積極的に自己検診したい 自分自身のためにも有益だった
	今後のケアへの活用	日頃、実施できることがわかり、ケアに取り入れたい 知っておくと必要時情報提供できる
押しかけ勉強会継続の希望	自分たちのケアの振り返り・再学習の機会	今一度理解を深めることが出来た 寝たきりにしているのが自分たちだと気づいた
	新たな情報取得の機会	知らないことが学べてよかった 病気のイメージや気をつける点などの勉強になった
	今後も継続した押しかけ勉強会の実施希望	命の終りについてもっと具体的に詳細に知りたい 生活習慣病予防などの話を聞きたい
勉強会を通した連携の深まり	急性期病院の治療・看護を知る機会	急性期病院での取り組みを知ることができた 急性期看護について知る良い機会になった
	病院との連携感の高まり	教えていただけるつながりが出来た このような形で連携していけることが心強い
	連携方法の充実の要望	もっと簡単な連携方法を見つけてほしい 連携を気軽にと思うが敷居が高い気がする
	開催目的の提示	文書をいただくと開催目的の趣旨がわかる

表2 押しかけ勉強会の内容・方法・連携への評価

り理解することができた」など《映像や写真の活用による関心の深まり》を感じ、《実技等の体験学習で学び》を得ていた。

## 2) 【言葉や内容への理解不足】

「押しかけ勉強会」で訪問する施設は、医師や看護師が中心の開業医、看護師のみの訪問看護などの施設、それに加えて介護福祉職などの多職種が働く施設がある。急性期病院での看護実践や知識の伝達は、多職種が働く福祉施設では、「ヘルパー職には難しいところがあった」や「専門用語があり難しさがあった」と医療用語が多く含まれる内容に《言葉や内容への理解不足》を感じ、《職種による理解の差》があった。

## 3) 【ケアの振り返りと今後への活用】

押しかけ勉強会の参加について、「いろいろな方向へ目を向けスキルアップできるようにしたい」と《多様な支援に向けてスキルアップしたい気持ち》をもっていた。また、勉強会の内容について「日頃、実施できることがわかり、ケアに取り入れたい」とケアに活かしたい思いや「知っておくと必要時情報提供できる」と予備知識をもち、《今後のケアへの活用》を考えていた。さらに、「今一度、理解を深めることができた」、「寝たきりにしているのが自分たちだと気づいた」と日常の《自分たちのケアを振り返り、再学習の機会》と感じていた。また、乳がんやスキンケアがテーマの勉強会では、《自分自身の自己管理への活用》として「積極的に自己検診したい」「自分自身のためにも有益だった」と研修参加者自身のこととして内容に興味をもっていた。

## 4) 【押しかけ勉強会継続の希望】

参加者は、当院から自施設に押しかけてこられることに対して、「知らないことが学べてよかった」と《新たな情報取得の機会》と感じ、「急性期での取り組みを知ることができた」と「急性期病院の治療・看護を知る機会」ととらえ、「命の終わりについてもっと具体的に詳細に知りたい」、「生活習慣病予防などの話を聞きたい」と《今後も継続したおしかけ勉強会の実施を希望》していた。

## 5) 【勉強会を通じた連携の深まり】

当院との連携については、「このような形で連携していけることが心強い」「教えていただけるつながりが出来た」と勉強会をきっかけとして《病院との連携感の高まり》を感じていた。しかし、「もっと簡単な連携方法を見つけてほしい」や「文書をいただくで開催目的の趣旨がわかる」など勉強会という形式ではない《連携方法の充実の要望》や押しかけ勉強会の《開催目的の提示》など目的が十分に伝わっていないと感じている参加者もいた。

## V 考察

「押しかけ勉強会」は、当院からの提案で地域の医療福祉施設に押しかけていく勉強会である。これまで、この取り組みについて受け身である対象施設からの評価について明確にしてこなかった。今回の調査から、「押しかけ勉強会」を通して急性期病院が知識の提供にとどまらず、ともに学び合う姿勢をみせることで、「今後、相談がしやすい」等の連携強化に向けた反応が得られ、概ね受け入れられていることが明らかになった。これは、急性期病院が継続する看護実践について情報提供を行い“地域と共に”よりよいケアを提供したいという「押しかけ勉強会」の目的が地域の医療福祉施設に伝わったためと考えられる。近年、在院日数の短縮から、慢性疾患を抱えて退院する高齢者も多く、医療やケアの継続が重要である<sup>2)</sup>。「押しかけ勉強会」で新しい知識を得て、自身のケアを振り返り、日常ケアに活用する機会になったことで満足度の高い勉強会につながったと考えられた。これらのことから「押しかけ勉強会」の実施は、急性期病院と地域の医療福祉施設相互のニーズが合致していたと推測された。

当初、「押しかけ勉強会」はただ単純に地域に出かけていくことを目的としていたが、その後の経過の中で看看連携を主体とするものに変化していった。しかし、押しかける医療福祉施設によっては、対象者は看護師だけでなく介護福祉職やリハビリ職種など多職種にわたる。介護福祉職にとっては専門用語があり難しいと感じているという今回の調査結果から、医療用語が多く含まれる講義内容について理解不足があると思われる。今後の課題として参加対象者が複数の職種にまたがる勉強会の場合、計画時に参加者のレディネスを把握することが必要である。また、参加対象者の職種によって言葉や説明内容の変更、映像や実技等の視覚や体感をとり入れる工夫をすることで、参加対象者の理解につながり、興味をひきだすことになると考える。

療養支援では、それぞれの医療介護福祉施設の得意・不得意なケア、特殊性、施設の実情を認識し、施設の状態に合わせて入院中のケアの方法を変化させていく必要がある<sup>4)</sup>。地域へ押しかけていくことは、「看護実践について情報提供を行う」ばかりでなく医療の機能分化により互いの役割分担について確認していくことや相互の理解を深めていくこと、成長し合う関係性の構築になる。

## VI 結語

今回、当院からの提案で地域の医療福祉施設に押

しかけていく「押しかけ勉強会」の評価を行った。その結果、急性期医療や専門的知識を内容とした「押しかけ勉強会」は、地域の医療福祉施設からの実施継続が強く、連携の深まりを感じていた。今後の課題として、参加対象者の理解や興味を引き出すには、対象者のレディネスを把握し、職種によって内容や言葉を工夫することが必要である。

## 引用文献

- 1) 内閣府：高齢社会白書. 2014
- 2) 篠田道子：退院調整の基本知識. ナースのための退院調整. 日本看護協会出版会：2-9, 2009.
- 3) 厚生労働省：社会保障制度. 2013.
- 4) 宇都宮宏子：病院における在宅療養への退院支援・退院調整活動. 看護白書. 日本看護協会出版会：35-40, 2011.